

世代間関係にみる「子孝行」と「母系」シフト

北村 安樹子

＜結びつく親子の居住空間・生活時間・家計＞

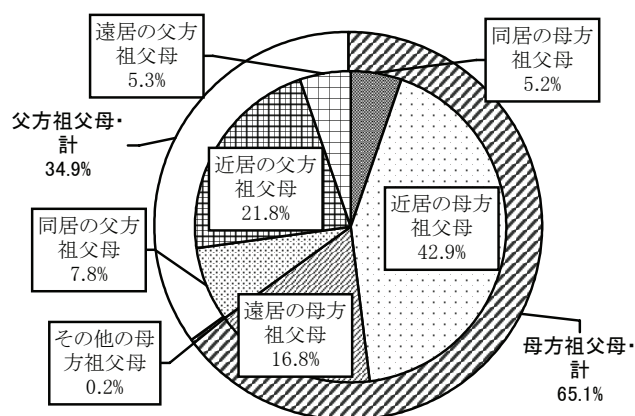
景気の方行に不透明感が続くなか、居住空間・生活時間・家計という3つの側面で若い家族とその親が結びつきを強めている。例えば、子の住居費や生活費を節減するために親子が同（近）居する「居住空間の接近」、子夫婦の育児を親が時間を割いて手伝ったり、親子が週末をともに過ごす「生活時間の共有」、子の住宅ローンや孫の教育費の不足を親が補填する「家計の支援」といった現象などがあげられよう。背景には、雇用や収入の見通しが不安定化する若年層の経済状況と、強まる親の「子孝行」がある。

他方、少子化でいまや希少な存在となった孫を介して、親子三世代が余暇や消費を楽しむいわゆる「三世代市場」は、限られたパイながら、貴重な有望市場としてなお注目され続けている。本稿では、当研究所が実施した世代間関係をめぐるアンケート調査結果や、子どもの性別選好の変化に関する国立社会保障・人口問題研究所のデータを題材に、これらの現象の背景について考えてみたい。

＜祖父母と孫の交流機会は「母系」中心＞

当研究所が小学校3年生までの子どもを持つ母親を対象に行ったアンケート調査によると、孫とふだん会う機会がもっとも多い祖父母は、孫の自宅から1時間以内に住む「近居の母方祖父母（42.9%）」であった（図表1）。次いで多かったのは「近居の父方祖父母」（21.8%）、「遠居の母方祖父母」（16.8%）であったが、居住関係を別にして母方と父方の割合を比較すると、父方祖父母の合計割合（34.9%）を母方祖父母（65.1%）が30ポイント以上も上回っている。つまり、若い孫がふだん祖父母と会う機会は、母娘を中心とする母系関係に偏っている。

図表1 ふだん孫と会う機会が多い祖父母(居住関係別)



注1：調査対象者は、当研究所生活調査モニターのうち、中学3年生までの子どもを持つ父母1,078組およびその子どものうち小学4年生～中学3年生までの者（該当子が複数いる場合は最年長子のみ）567人。有効回収数（率）は、父親927人（86.0%）、母親930人（86.3%）、子ども548人（96.6%）。調査時期は2007年3月。

注2：本稿では、このうち小学校3年生以下の子どもを持ち、母方・父方のいずれかの祖父母が健在であると答えた母親601名の回答結果を使用。
資料：第一生命経済研究所「子どもの生活に関するアンケート調査」より作成。

＜孫の教育費支援では偏りなし＞

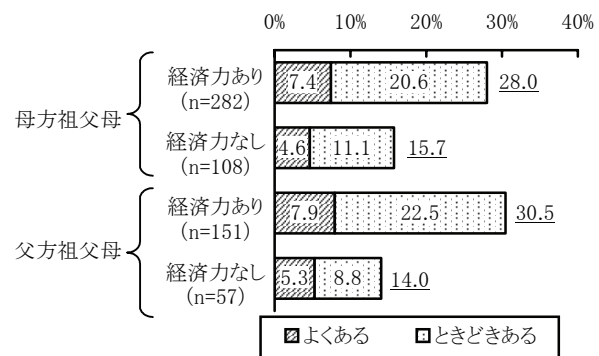
次に、孫の教育費に関する祖父母からの経済的支援についてみてみよう。先の調査で、ふだん孫と会う機会が多い祖父母から孫の教育費に関する経済的支援を受けることがある（「よくある」「ときどきある」の合計）と答えた母親は、母方祖父母の場合で24.6%、父方祖父母の場合で26.2%となっており、

母方と父方の差は小さい（図表省略）。

一方、こうした支援は祖父母の経済状況によって異なり、母方・父方を問わず祖父母の暮らし向きに経済的ゆとりがあると答えた母親ではおよそ3人に1人が支援を受けているが、ゆとりがないと答えた母親ではその半分程度の水準にとどまる（図表2）。

ちなみに、孫の父親の年収による差はみられなかった。孫の将来を大きく左右しうる「教育費」に関しては、収入に比較的余裕がある子夫婦であっても、受けられる支援をありがたく受け取るからなのかもしれない。

図表2 ふだん孫と会う機会が多い祖父母からの孫の教育費支援(祖父母の経済的ゆとり別)



注1：下線数値は、「よくある」「ときどきある」の合計割合。「経済力あり」は、祖父母の暮らし向きに経済的な「ゆとりがある」「どちらかといえば、ゆとりがある」と答えた母親、「経済力なし」は「ゆとりがない」「どちらかといえば、ゆとりがない」と答えた母親。

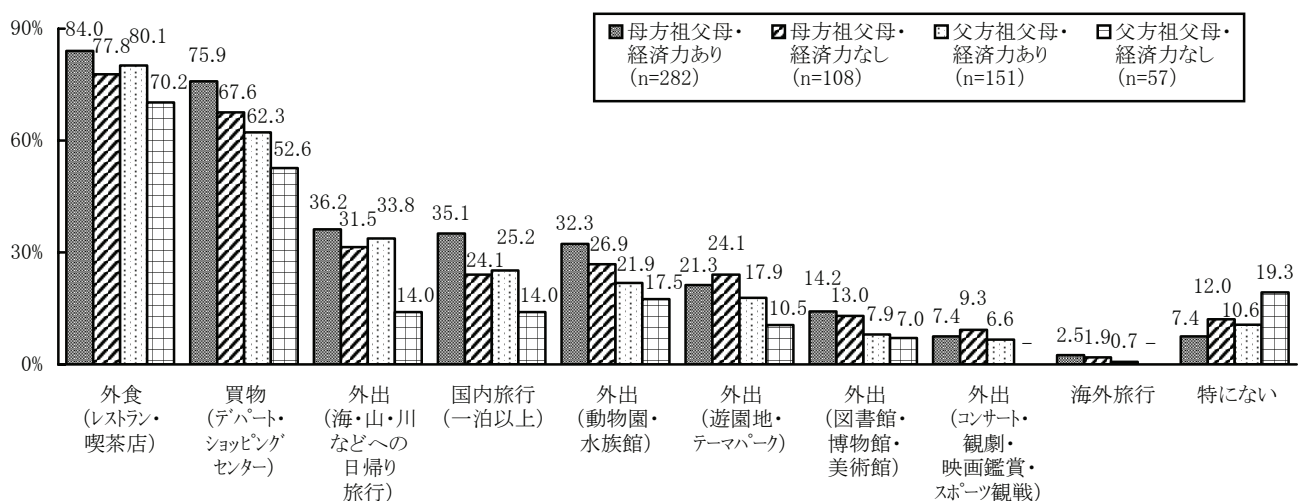
注2：この調査では、ふだん孫と会う機会が多い側の祖父母からの支援状況についてのみたずねている（ふだん孫と会う機会が少ない側の祖父母からの支援状況についてはたずねていない）。

資料：図表1に同じ。

<余暇・消費行動は「母系」中心>

では、外出や旅行など、三世代による余暇・消費行動に関してはどのような傾向がみられるだろうか。結論からいえば、祖父母、子夫婦、孫という三世代での各種の余暇・消費行動では大きく母系関係に偏りがみられ、その傾向は祖父母が経済力を備える場合により顕著となっている（図表3）。父方祖父母の場合、暮らし向きに経済的ゆとりがある場合であっても、経済的なゆとりのない母方祖父母との三世代余暇・消費行動経験者の割合を下回っている項目も少なくない。こうした余暇・消費行動に関する費用

図表3 ふだん孫と会う機会が多い祖父母との三世代での余暇・消費経験(祖父母の経済的ゆとり別) <複数回答>



注：設問文は、「この1年間に、あなたのご家族とその祖父母の三世代で出かけたことがあるものをすべて選んでください」。

資料：図表1に同じ。

負担は、母方・父方の違いや祖父母の経済状況にかかわらず、圧倒的に祖父母の側に偏っているが（図表省略）、それにもかかわらず、これらの経験には著しい母系関係への偏りがみられる。

従来より、このような三世代消費・余暇市場の牽引役は、経済力を備えたシニア世代とその娘一家であるといわれてきたが、実際の経験に関する今回の調査結果からも、孫の母親とその母方祖父母という母系関係が中心となって、こうした市場を支えている様子が浮かび上がる。

＜女兒選好とその背景＞

ところで、一昨年発表された守泉（2008）によると、日本ではこの20年間で子どもの出生に関する男児選好が薄れ、女兒が多い組み合わせを選ぶ人が増えているという。同氏はこの背景について、これまで親が子どもに期待してきた働き手や跡継ぎといった経済的価値に代わり、生活の楽しさといった心理的側面ないしは介護といった側面での価値が重視されるようになってきているためではないかとの見方を示している。その根拠として、先の論文では子どもに期待する理想の性別組み合わせ別に「子どもを持つ理由」を比較し、女兒を含む組み合わせを望む女性では「子どもがいると生活が楽しく豊かになるから」や「子どもは老後の支えになるから」をあげる傾向が強いことを指摘している（図表4）。

このような分析をふまえて先の調査結果を振り返ってみると、孫の教育費に比べて、母方祖父母が娘一家との三世代型消費・余暇に拠出する費用には、単なる「子孝行」にはとどまらず、老後生活への「投資」ないしは「必要経費」という意味も透けてみえるように思われる。娘をもつシニア世代にとっては、孫や娘が老後生活を心理的側面で支えてくれるという点では心強いかもしれないが、そのためには一定の出費を覚悟しておく必要もあるといえそうである。

図表4 子どもを持つ理由(理想子ども数とその性別組み合わせ別)＜複数回答＞

(単位:人・%)

理想子ども数	理想の男女児組み合わせ	標本数	か生子に活ながる楽しいうら豊と	然を結な持婚こつしてだとはども自も	らも好きをきなちのい子かど	か係子らをども安も定はさ夫婦関	る社子か会ども支はえ将と来なの	支子えどもにはなる老か後の	が夫や親むからなど周囲	めと子れでどもを囲からつこ
理想1人	男1女0	16	56.3	31.3	25.0	18.8	18.8	25.0	6.3	31.3
	男0女1	54	64.8	46.3	29.6	25.9	9.3	18.5	11.1	5.6
理想2人	男2女0	34	64.7	55.9	23.5	11.8	20.6	5.9	8.8	0.0
	男1女1	1368	74.1	59.4	38.2	27.4	18.1	20.8	16.7	7.2
	男0女2	190	73.2	52.6	24.2	27.4	18.4	16.3	11.6	7.4
理想3人	男3女0	13	84.6	23.1	15.4	7.7	30.8	7.7	7.7	0.0
	男2女1	56	85.2	63.0	43.1	33.6	23.7	20.0	13.2	5.7
	男1女2	766	86.6	58.1	35.8	30.8	27.0	26.6	11.7	6.3
	男0女3	28	89.3	57.1	10.7	28.6	21.4	35.7	14.3	7.1
理想4人		273	87.9	57.9	37.4	29.3	30.0	22.0	8.8	5.5
理想5人以上		41	82.9	63.4	19.5	22.0	22.0	22.0	7.3	7.3
理想男女児組み合わせなし		1803	77.8	61.0	31.6	24.1	20.6	14.0	11.4	5.2
総数		5188	78.8	59.6	34.7	27.1	21.5	18.9	12.8	6.1

注：国立社会保障・人口問題研究所 『第13回（2005年）出生動向基本調査（夫婦調査）』における初婚同士の夫婦で50歳未満の妻の回答。

理想子ども数0人と、理想子ども数・理想男女児組み合わせの希望有無・理想男女児組み合わせの不詳を除く。

資料：守泉理恵（2008）「日本における子どもの性別選好：その推移と出生意欲との関連」『人口問題研究』64-1：p. 11